

一休和尚と地獄太夫

～地獄太夫は久米田寺に葬られたのか～

1 一休和尚 その実像

一休の生涯 「一休和尚年譜」・「一休和尚行實」より

応永元（1394）京都嵯峨野の民家に生まれる。幼名「千菊丸」（せんぎくまる）

応永 6（1399）安国寺で出家、「周建」（しゅうけん）と名付けられる

応永 17（1410）西光寺の謙翁宗為（けんおうそうい）に入門（17 歳）「宗純」という名を得る

応永 21（1414）謙翁宗為入寂、自殺を図る（21 歳）

応永 22（1415）近江堅田祥瑞庵の華叟宗曇（かそうそうどん）に師事

応永 25（1418）華叟から「一休」の号を授かる、翌年カラスの声を聴いて大悟

応永 34（1427）この頃子どもを授かり「紹偵」、後、紹偵は摂津桜塚瑞輪寺に住す

永享 4（1432）南江宗沅（なんこうそうげん）らと和泉地方に遊ぶ

永享 7（1435）木剣を携えて泉南（堺）の市中を闊歩する

文安 4（1447）大徳寺の内紛に心を痛み餓死しようとする

享徳 2（1453）大徳寺炎上、伽藍の大部分焼失

康正 2（1456）薪の妙勝寺に草庵を結んで中興し、師恩に酬いる意味で酬恩庵と号した

文明元（1469）兵火を逃れ奈良・和泉を経て住吉に入る

文明 2（1470）住吉の薬師堂で森女に出会う

文明 3（1471）森女に再会し一緒に暮らしはじめる

文明 6（1474）後土御門天皇の勅命で大徳寺第四七世となる

文明 8（1476）住吉に床菜庵を建てる

文明 9（1477）兵を避けて和泉の小島（岬町）に滞在

文明 11（1479）尾和宗臨（堺の豪商）の援助で大徳寺法堂を再興

文明 13（1481）酬恩庵にて入寂（87 歳）

●森侍者（しんじしゃ）

盲目の美女である。一休は 77 歳で「森女」（年齢 20 代）と出会い、臨終まで酬恩庵で一緒に暮らす。森侍者の素性は不明で、諸説あるが、盲目の旅芸人で一休がその境遇に同情した。もうひとつの説は、一休と同じく南朝系の血筋の女性であり、住吉神宮の巫女だった。

●『狂雲集』

一休宗純による風狂破格の世界を呈する漢詩集。ほとんどが七言絶句で、狂雲とは一休の号。仏門の求道者の自分を詠んでいるかと思えば、女色に耽溺する自己を詠むといった具合で、この書名のように狂雲集の世界は尋常一様ではない。

●応仁の乱

南北朝合一（1392 年）と応仁の乱（1467-1477 年）の間は、なんとなく平和な時代とされているが、源平合戦から江戸幕府成立までの約 400 年間の武士の時代とは基本的に合戦時代、「切り取り強盗は武士の習い」である。したがって、京の市中は、強盗続出、乞食・浮浪者・放置死体は日常光景であった。デタラメな政治に対して、一休は幕政への批判者としても有名だった。『狂雲集』にも幕政批判の漢詩がある。

●大徳寺再建

応仁の乱によって、京都は荒廃し、大徳寺も焼失した。1474 年、後土御門天皇は一休（この時 80 歳）に大徳寺の住職になるよう勅命が下る。それは、焼失した大徳寺再建の命令でもあった。一休は地位や名誉を拒否する生き方をしてきたので、やや悩んだようだが、承諾した。再

建資金の献金依頼のため京都・堺を訪ねた。皆、「一休の依頼ならば」と引き受けてくれた。そして、1479 年、大徳寺の仏殿が再建された。

しかし、一休は大徳寺に住まわず、都の外れの小さな庵(酬恩庵)に住み、そこから大徳寺へ通った。大徳寺再建の 2 年後、一休宗純は 87 歳で永眠した。

●一休宗純の著作

『般若心経抄図会』

『水鏡目無草(水鏡注目無草)』

『一休骸骨』(柿崎家本復刻)

●一休和尚の烏扇

「国花万葉記」 一休和尚の烏扇 (元禄 10 年・1697)

「和泉名所図会」 聳入一休 (寛政 8 年・1796)

「難波丸綱目」 一休和尚の烏扇 (享和元年・1801)

「五畿内産物図会」 一休烏扇 (文化 10 年・1813) 116 年間

2 一休和尚が「とんち小僧」になるまで

●『一休ばなし』『一休関東咄』『統一休はなし』寛文 8 (1668) ～享保 16 (1731) 年

●『住吉名勝図絵』『和泉名所図会』『攝津名所図會』寛政 6 (1794) ～寛政 10 (1798)

●『一休蜷川 狂歌問答』1803 年～

●『一休諸国物語圖會』1836 年『一休禅師諸国物語』1852 年

●『日本お伽噺』『長編講談』明治・大正期

●『講談社の絵本 一休さん』昭和 13 年

●テレビアニメ『一休さん』昭和 50 (1975) 年 10 月から 1982 年 6 月まで、全 296 話が放送

3 一休と地獄太夫 地獄太夫は久米田寺に葬られた！？

「本朝醉菩提全傳」 山東京伝編 一陽斎豊国画 文化 5 (1808) 年

著者の山東京伝について

江戸時代後期の戯作者・浮世絵師

『江戸花京橋名取 山東京伝像』 鳥橋斎 栄里 (ちょうきょうさい えいり)

宝暦 11 (1761) 年：江戸・深川木場の質屋・岩瀬伝左衛門の長男として生まれる

安永 2 (1773) 年：父の質屋を離れて京橋銀座一丁目にある町屋敷の家主になる。通称を「甚太郎」から「伝蔵」に改めていた。京伝というのは京橋の「京」と伝蔵の「伝」に由来する。京橋が江戸城紅葉山の東にあたることにちなんで山東。

安永 4 (1775) 年：北尾重政に浮世絵を学ぶ。画号を北尾政演 (きたお まさのぶ) と称する。以後、多くの戯作・狂言本などに挿絵を描く。

天明 2 (1782) 年：**蔦屋重三郎**方で大田南畝、恋川春町、唐来参和らと会し吉原で遊ぶ。この年以降、**山東京伝**と称する。

錦絵はほぼ明明年間に集中し、寛政 3 年以降の京伝の作品はほとんど蔦屋重三郎・鶴屋喜右衛門が版元となっている。京伝の合巻は特に挿絵の面白さが魅力で、大変な人気を誇っていた。考証的な仕事、風俗絵巻も残している。

天明 9 (1789) 年：**黄表紙本**に描いた挿絵が咎めを受け過料処分となる。

寛政 2 (1790) 年：遊女菊園を妻に迎える。**曲亭馬琴**が訪れ入門を乞う。過料に処せられたことを理由に戯作執筆をやめようとするが、蔦屋重三郎の懇請で思いとどまる。

寛政 3 (1791) 年：洒落本 3 作が禁令を犯したという理由で手鎖 50 日の筆禍を受ける。

筆禍後は曲亭馬琴・感和亭鬼武らがしばしば代作を行なう。

寛政 4 (1792) 年：曲亭馬琴を薦屋重三郎の手代として推薦する。

寛政 5 (1793) 年：書画会の収益を元手に銀座に京屋伝蔵店（京伝店）を開店する。菊園死亡

寛政 6 (1794) 年：このころより書肆より**潤筆料**（原稿料）を得るようになる。

寛政 9 (1797) 年：薦屋重三郎が死去。

寛政 12 (1800) 年：遊女・玉の井（百合）を妻に迎える。

文化 13 (1816) 年：胸痛の発作が起き、急逝する。

1992～2024 『山東京傳全集』ペリカン社から全二十一巻刊行される

京伝を巡る人々

薦屋重三郎 NHK 大河ドラマ『べらぼう～薦屋栄華乃夢断～』

江戸文化を代表する文化プロデューサー

吉原の貸本屋に始まり、大手地本問屋が軒を連ねていた日本橋通油町（中央区日本橋大伝馬町）に移転し、耕書堂を開店

●「新吉原細見」 山東京伝著 薦屋重三郎刊 寛政 2 年京伝序 耕書堂蔵板目録を付す。

●「艶本枕言葉」（上巻・薦屋の図）北尾政演（山東京伝作・画）薦屋重三郎刊 三冊

曲亭馬琴（滝沢馬琴）武家出身だが 23 歳で山東京伝に弟子入り、京伝の紹介で薦重の耕書堂で働く、26 歳で商家の娘と結婚し町人の身分となる。『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』原稿料のみで生計を営むことのできた日本で最初の著述家。

喜多川歌麿 薦重の元で出版した狂歌絵本「画本虫撰」（えほんむしえらみ）が評判となる。寛政 3 (1791) 年、女性の胸部から上を描く大首絵という様式を発表し、人気絵師となり、当時評判の水茶屋の美人や遊女などの半身像や全身像を描きました。

葛飾北斎 勝川春朗の名で役者絵や狂歌絵本の挿絵を描きますが芽が出ず、勝川派を離れて耕書堂に出入りするようになり曲亭馬琴と知り合い、タッグを組んでヒット作を生み出します。この二人の貢献もあり、読本は一大ブームとなる。また 4,000 点以上の図案をまとめた画集「北斎漫画」が大ヒット。「漫画」という単語が定着する。勝川春朗、勝春朗、群馬亭、宗理、辰斎、辰政、雷震、雷信、雷斗、戴斗、為一、画狂人、卍老人、不染居、これらはすべて葛飾北斎の画号。

葛飾北斎を名乗ったのは 5 年間。引越し魔としても有名、生涯で 93 回。

東洲斎写楽 寛政 6 (1794) 年 5 月、彗星のごとく浮世絵界に登場します。江戸のヒットメーカーである版元・薦屋重三郎の元で、歌舞伎役者の半身像を描いた「大首絵」を、なんと 28 図一挙に出版。その後 140 数点に及ぶ浮世絵を世に送り出し、忽然と姿を消します。その期間、わずか 10 ヶ月。

大田南畝 狂歌の名人・蜀山人（四方赤良）。天明狂歌の時代で、狂歌がひとつの社会現象化した。そのきっかけとなったのが、狂詩集『寝惚（ねぼけ）先生文集』で、そこには平賀源内が序文を寄せている。薦重は自ら狂歌を詠み、黄表紙を作ったりもした。狂歌会は、「吉原連」「四谷連」「四方連」「落栗連」などのグループに分かれていたが、薦重とともに「吉原連」の中心になっていたのは妓楼・大文字屋の主人、加保茶元成（1754～1828）だった。狂歌連の面々は“吉原人脈”とも深く関わっていたのだ。大文字屋では、薦重が赤良や菅江、さらには戯作者の恋川春町（＝狂歌師・酒上不埒）らと宴席を囲んでいたようだ。

大阪の銅座（船場北愛珠幼稚園）にも勤める御家人であった。

田沼意次と岸和田

天明 6 年將軍家治の死去に伴い失脚。翌年松平定信が老中首座になり寛政の改革が始まり出版の規制が始まる。ここに登場するほとんどが咎を受ける。

「白河の 清きに魚も 住みかねて もとの濁りの 田沼恋しき」

天明 7 (1787) 年遠江国相良城の接收。磯上村も幕府領に。

●「本朝醉菩提全傳」について

山東京伝の読本 9 作目『稻妻表紙後編 本朝醉菩提全傳』、第 6 作目『昔語 稻妻表紙』（文化 3 年）の続編。清の天華堂蔵主人著『濟顛大師醉菩提全傳』を和訳した『通俗醉菩提全傳』を下敷きにした作品

大きく四つの物語で構成される①彦惣夫妻と子の話 ②梅津家の話

③佐々木家・名古屋家の話 ④酒売亦六と於三輪の話

全 16 章の内

諾迦跋釐駄尊者（だかはりだそんじゃ）醉菩薩方便品（すいばさつほうべんぼん）第三から
迦哩（かり）地獄信解品（じごくしんげぼん）第七 まで

②「梅津家の話」の主な登場人物

由利太夫勝元

・

・ 父・梅津豊前左衛門清景（是心）

梅津嘉門景春（かげはる）

此花

彦丸・・・是雲・・・還俗して野曝悟助

一休から破門され浪花千日寺で葬具屋となる

玉蟲・・・紅児（くれない）

安計呂山百魔山姥に捉えられ病気で他界

乙星・・・緑児（みどり・腕に七揺光破軍星の黒子アリ）

崖下に落とされる → 陸作に助けられる

（強盗）有漏路太郎

無路路五郎

（近江志賀の住）陸作

袖萩

安計呂山百魔山姥（岩芝）

提婆仁三郎

岩芝

京五条坂に住まいし百魔という白拍子なりしが、大和国佐々木の家臣、不破道犬という人にあがないだされて妾となり、懐胎のうえゆえありていとまをうけ、ほどなく木枯竹斎の方へ縁づきて産み落とせしが男の子、これ道犬が胤（提婆仁三郎）、不破家の仇敵名古屋小山三。胸毛の黒平の妻となつて岩芝と名乗る、今は安計呂山に住む故に百魔山姥と異名をとる。

野曝悟助

梅津嘉門景春の子、12 歳の時に父が戦に敗れ、落ち延びる際に母を殺され、妹二人は掠われる。父が戦のさなか旧知の一休和尚を訪れ彦丸を弟子にして欲しいとの願いを伝えていたため是雲と名を与えて弟子としたが、その素行の悪さから破門される。

一休和尚と地獄太夫の出会い

堺高須の遊郭で若衆と悶着を起こしている所に地獄太夫が通りかかり問答をする。

休「聞きしより 見て美しき 地獄かな」

地「死に来る人の おちざるはなし」

「山居せば 深山の奥に 住めよかし ここは浮世の さかい近きに」

「一休が 身は身ほどに 思わねば 町も山家も 同じ住処よ」

「闇の夜に 鳴かぬ鳥の 声聞けば 生まれぬ先の 父ぞ恋しき」

浮世絵に描かれた一休と地獄太夫

関	(一休・地獄太夫)	「東海道五十三對」	歌川廣重 (初代)
遊女地獄	一休禪師		歌川國芳
遊君地獄太夫	「自筆三十六句会」		歌川國貞
地獄太夫	がいこつの遊戯ヲゆめに見る図	「応需暁斎楽画第九号」	河鍋暁斎
地獄太夫と一休			河鍋暁斎
地獄太夫	「善悪三十六美人」		豊原國周
地獄太夫	「東錦昼夜競」		揚州周延
遊君地獄太夫	「月耕随筆」		尾形月耕
一休と地獄太夫	(太平新聞第1号附録)		水野年方
地獄太夫悟道の図	「新形三十六怪撰」		月岡芳年
その他展示していない浮世絵			

野晒悟助

『**粹菩提 悟道野晒**』河竹黙阿弥が脚色、『野晒悟助』として歌舞伎上演される。自らの粗暴さを悔い、月の半分は仏道修行をし、あとの半分は?客として人助けをし、葬儀屋となる。物語としては、ヤクザに絡まれた二人の娘を助け出し、その二人から求婚されるという歌舞伎らしい伊達男のシンプルな流れ。

『**鶴千歳曾我門松**』1865年に初演。侠客・野晒悟助は因縁をつけられて困っている二人の娘を助け、その二人に惚れられる。懲らしめた相手の仕返しにあうが、母の命日で手出しができない。命日があけて、最後は野晒悟助が悪者たちをバッタバッタと打ち倒す。という勧善懲悪のスカッとした話で、野晒悟助は強くてモテる色男というヒーロー。

「**鶴千歳曾我門松**」初～三編 勝彦蔵著 歌川国貞 (二代) 画 蔦屋吉蔵板
数多くの歌舞伎の名場面を描いた浮世絵が出版され大好評を博す

「本朝醉菩提全伝」 卷四 跋陀羅尊者 地獄信解品第七 末尾

あるじ夫婦はわけて悲しむこと深く、我家が千金の大利を得らるは皆彼が功なり。

殊に其の名四方に聞こえたる者なれば、せめて葬送を美々しくいとなみなすべしなど評議す。一休是れを聞きたまひ。葬儀をおもくせんこと彼が意にかなふべからず。唯経帷子一重を著せ、棺桶にをさめてかかげゆき、埋むることもせず野に棄てさすべしとのたまふ。

あるじ夫婦、それはあまり情けなき仕業なりと心のうちには思いたるが、さずが一休ののたまうことなれば、且其の詞にしたがう体をなし居るに一休、野晒に対してかくかくせよと命じたまえば、野晒立ち上がりて地獄が亡骸を抱き揚屏風の裏にとり方付つるに、枕の下より一張の短冊出たり。

彼が自筆にて一首の歌をかく野晒其歌をよみあぐるに、

我死ば焼な埋な野にすてて瘦たる犬の腹をこやせよ

一休これを聞給ひ我思し所果て然り、彼は檀林皇后遺命して其屍を西郊に棄しめたるを意とす、必しも葬儀を用て彼が意に背事勿れと宣へば、夫婦は一休の宜所少しも違ざるを感嘆して其の詞に従ふ。偕一休は白布の帷子を取寄経文を書いて與、野晒をば此に残置て獨飯庵し給斯て、其夜に到地獄が空き骸を裸となし経帷子一重を着せて桶に納め、野晒を交僅かに四五人にてこれを擔行けるに、一休途中に出迎ひて前に立經を讀給ふかと思へばさはなくて、

繰出あゆみとりおきて生れた儘のさらば垣矩き

夜半に見し夢は長刀に長脇差をぶつこんでおせさよいさ

と都のぬめり節を唄給ひて踊狂つつ付添行給ひ、遂に八木郷久米田寺の三昧に至り、桶より屍を出し葆の裏に捨置てぞ飯ける。

然るにさしも美麗なりし地獄が姿七日七日に變じつつ、蘭麝を擢焼籠たる緑の黒髪の蓬の如くに乱れ、錦欄を覆いたる素肌は青く腫上り、白粉を施したる花の顔は腐て臭気を出し、燕脂をいどりし朱の唇は爛て血を流す。瘦たる犬は麗玉を垂たる乳を喰破餓たる鳥は秋波をよせたる眼をついばみておそろしき姿となる。

平日に調し爪音も唯松風と虫の音に残れるのみなり、處々の肉も切腹も破れて五臓六腑邊りに乱れ、又後は肋の骨を現はし肉も腐流て白蛆となり、青蠅集て邊りに滿臭氣盛に人を穢す。

日を経て臭氣も薄くなり骨は残る肉も乾き、蛆も此處彼處に這散て蠅も飛失乱れた髪は風に散て處々の草の根に纏りぬ。程なく四十九日も近くなるに男女の界もなく雨に注ぎ日に曝して今は臭香もなくただ残れる物は一重の帷子のみ。

遂に一具の白骨となりて葆に横はわりぬ浅猿なども云べからず。

兼て彼を戀慕ひつる少年等せめて香華を手向て其霊を祭ばやと爰に來り、此光景を見て驚き悟り執着の心を轉し色欲の念を断者多かりけり。

四十九日に當れる日一休和尚野晒悟助併びに珠名の長夫婦を具して此所に来り給ひ、地獄が白骨を引起て見せ給ふは骨々のつがひ鎖の如くに續きて全き一具の骸骨なり。

皆これを見て奇異の思ひをなすに、一休宣わくこれを鎖子骨と号く是凡人にあらざるの証なり彼は乃ち北方女宿妄女星の化する所なり、権に人間に降て美女に生色を賣てあまたの人に親み死して爛穢の姿を見せ九相の變ずる理を示す。

是色欲に耽る者をして驚悟させんが爲なり。己に彼が爛穢の姿を見て姪樂の墓なき事を悟り行跡を改めし数多ありと聞なほ此事を後世に傳へなば能誠めならん。

最早用なき此遺骨原の天上に返すべしとて、野晒に命じ柴を集て茶毘させ給ふに煙の中より七ツの星顯れ光明赫奕として空天に飛去けり。

偕其灰を埋て一ツの塚となしぬ。今八木郷久米田寺の境内にある女郎塚と云うは是なりとぞ。此地獄が事観音救世の悲願に金砂灘頭の鎖子骨となりし遊女の昔語りに能似たり。

「地獄太夫」 山田風太郎 愛憎因果序品第一

「あれ？ あの行列は何じゃ？」

「堺の 傾城衆ではないかの？」

三寸ばかり伸びた青い麦のなかから鍬を捨て農夫達が立ち上った。

「葬いじゃ 棺桶が見えまする」

「先に立っておらるるのは、ありゃ、一休さまではないか？」

往還の笈を背負った山伏と、熊野の絵解き比丘尼がささやいて、一緒に走り出した。

「仏は、高須町乳守の、地獄太夫じゃそうな……」

麴売りの老女がそう叫ぶのを聞いて、どこかへ急ぐらしい騎馬の侍もびっくりした顔になって、手綱をかいぐって人々のあとを追いついた。座頭も、童も、犬も、鶏も。

応仁元年晩春のある夕、泉州八木郷の野をぞろぞろ歩いてゆくのは、たしかに不思議な行列だった。乳守の遊女町を出たときには二十人精々の小人数であったのが、今はあらゆる階級を含めた百人以上もの群衆になって、その前の方に、二人の男に担がれているのは、まさに白木の棺桶である。それを囲んで、蓮歩重う移して、華やかな傾城端女郎、禿の群。

そして、一番真っ先を、一人の老僧が、如意を振廻し、鴉のようなしゃがれ声をはりあげながら、ひょこひょこと尻を踊らせてゆく。読経——ではない。今様の節廻しで、

煩惱犬を 　　いつわりの

恋で墮した 　　地獄めも

色則是空 　　餓鬼犬の

しょんべん地獄 　　しゃれこうべ

墨染の破れた麻衣に、鈍色の垢づいた袈裟をかけ、頭は赤銅色だが風に靡く髯は雪のよう——この呆れた坊主が狂雲子、沙門一休なのだ。

一休のうしろに、不動明王みたいに怖い顔をして従っている弟子の西念。それから老和尚の狂態を指して、頻りに頓世者の瓢阿弥が話しかけるのに、幽霊のように悄然と首を垂れて歩いているのは堺の豪商、鞠屋宗右衛門だった。

「地獄が死んだとよ——」

「なんで、どうして死んだのじゃ？」

新しくついて来た人々が、驚きに満ちた声でささやき交わすのは、一休の風狂ぶりではなかった。この天下の大和尚の奇行は今にはじまったことではない。「生きて水中に遊ばんよりは、しかし愚僧が糞となれ。喝」とか何とか引導わたして生魚を喰い散らしたり、元旦そうそう竹の先へ髑髏をつらぬいて、洛中の家へ、によこによこ差し出して廻ったり——はては、生身の普賢菩薩に対面せんとて、弦歌さざめく高須の傾城町を飄々と歩いていたり——それは三歳の童子も知る有名な話であるが、それにも劣らず名の高い地獄太夫は——おお、なぜ死んだのであろう？

「自害じゃとよ 懐剣で、乳の下を一突きに——」

その声が、やっとうしろの方まで伝わって来たとき、葬列はとまった。

すぐ眼の前に、久米田寺の甍が見えているのに、棺桶が下ろされたのは、路ばたの青い草むらの上だった。

一休和尚は、その棺の上に坐った。何ごとが起きたのか？——わらわらと群衆が駆け集ってくるのを待って、一休は如意をななめに構え、

「さて——皆の衆——」 大声で叫んだ。

「地獄太夫は、きのうの夜に死んだ。容色無双、一笑すれば三千の傾城顔色なしとうたわれ、その一笑をあがなわんために、或いは産を破り、或は罪に墮ち、甚だしきは生命さえも失った哀情未練の戯男どもは数知れず。その地獄太夫は、今、たしかにこの棺のなかに、永劫の眠り

を眠ってござる——かなしむ人もある、またよろこぶ人も少なくはなかる——」

どよめきわたる人々のなかから、老婆の声で、「仏罰じゃ!」と叫んだものがあつた。

一休は齒のない口で、きゅっと笑って、

「地獄自害のありようはこうじゃ。きのうの夜、わしは珠名屋のある座敷で、ここにおる西念と寝ておった、と思われい——いいや、西念は寝ていたのではない——ここで、この坊主のために、ちょっと弁じて置くが喃。わしは大好きじゃが、この西念め、金槌頭で、蛸も傾城も大嫌いじゃ。ただ、わしの老体を案ずるあまりについて来る石ぼうず。で昨夜も酒をしたたか飲んで、高軒をかいておるわしの傍で、それこの通り、閻魔大王が芥子をなめたような面構えで、坐禅三昧に入っておったと思われい——」群衆は、微かに笑った。弟子の西念は、むずと腕を組んだまま、にこりともせず天を眺めていた。高い空で雲雀が鳴いた。

「と——突然、西念に揺り起こされると、この瓢阿弥めが枕もとに腰を抜かしおって、とんと息の洩る法螺貝のような声で叫んでおるには、たた、大変じゃ、地獄太夫が、——そこで西念と駆けつけてみると、太夫の閨房、絵屏風の蔭に、一刀のもとに刺し殺された飼猫羅刹の死骸、それから、血の海のなかに例の地獄変相の桂衣を浸して、膝はしっかりと揃えたまま、うつ伏せに伏した覚悟の姿 抱きあげて見ると、双の拳に握りしめた懐剣で、左乳の下を見事に一突き、稀代の美女とはいえ罪深い女子じゃもの、さぞ死顔は悪相と思われようが、なんのなんの、瞳はふさと閉じたが死微笑浮かべて、とんと白蓮にも紛う美しさ」

人々は笑いを消して、恐怖の視線を白い棺にそそいだ。

「猫は冥土のさびしさに、供につれていったものであろうが、その少し前まで、ここに居らるる鞠屋どのが遊んでゆかれたのじゃが、そのときは太夫の様子に微塵の不審も感ぜられなんだと申す。またそのあとで、太夫の閨房の前を通りかかったこの瓢阿弥がなかで、低い、嬉しげな太夫の忍び笑いを聞いたそう。じゃによって、自害は全くの乱心とより考えられぬ——と、これは一案。

乱心、狂笑——そうであろ。じゃが、この一休には思い当ることがある。この乱心は悪魔の乱心、あの狂笑は夜叉の狂笑であつたのじゃ。よく聞かれよ。皆の衆」

一休は、しゅっと白髯をしごいて、

「何はともあれ、地獄はしたたか者であつた。去年の春——さても心憎い名をつけた遊女かな。とわしがはじめてこれと呼んだときじゃ。先ず『聞きしより見て恐ろしき地獄かな』とやったところめが、咄嗟に『生くる人も堕ちざらめやは』と返しおった。

『では、わしのような出家でも堕せるかな』とたずねたら『たとえ生き仏にもせよ生達磨にもせよ、わたしが手管の奈落に——と、片えくぼを彫って、『堕ちたお方は、禅師さま、たしか禅師さまのお弟子さまにもおいで遊ばした筈』と高らかに笑いおった。

なるほど、わしの弟子に喃、寂雲という未熟者がおって、この地獄に魅入られ邪淫のあげく、進退窮まって、あげくの果てに山門に首を吊るという恥を曝しおった。——流石のわしも、のっけからぎゃふんじゃ。

『じゃが、その昔平相国に仕えた白拍子に仏あり、道長公と歌をよみ交した江口の遊女に小観音あり、それに較べてことさらに地獄とは、そもいかなる心で名づけたのじゃ?』と問いただしたところが、

『丹花の唇は焦熱地獄、剣の山の指きりに雪の乳房は八寒地獄、ほんにわたしはひとたび男の堕ちたら更に浮ぶ期のない地獄でございますもの——わたしは男が憎いのでございます。三千世界の男という男を、一人残らず堕地獄としてやりとうございます、わたしの桂衣に五色の糸で地獄変相の図を繡って、わたしの飼猫に羅刹という名をつけたのは、ただひとえにこの心、この心はあらかじめお客さまに、よくよく合点いただいておりますのに、男というものは、ま何という愚かな、——とんと、飛ぶ蛾の灯に集って落ちるも同然——』

又高らかに笑いおった。